

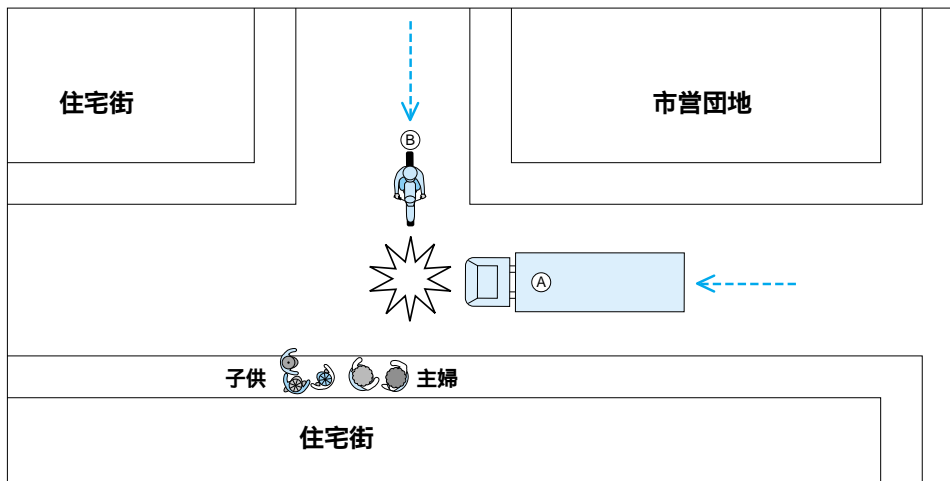
職場における 交通安全指導

Part 64

事故事例に学ぶ

31

住宅街の路地で子供の自転車と衝突



事故の概要

発生状況

日 時：平成18年2月某日 午後5時30分頃
天 候：曇り

道路状況

住宅街の市道で、道路幅が約6mのT字路交差点

事故の当事者

運転者A(2tトラック)：22才、男性
被害者B(自転車)：7才、小学1年男子

被害状況

A：前部バンパー右側微損
B：左足首骨折、全身打撲(全治3か月)

事故状況

Aは入社後2か月余りの新人ドライバーで、日頃から先輩ドライバーに運転についてのアドバイスを受けていた。

事故当日、Aは午前7時頃会社を出発、食料品を積み込み県内数箇所のスーパー、コンビニで商品を降ろし、最後の搬送先となるコンビニに向かう途中であった。

会社出発時、Aは搬送先の運行経路を地図で確認していたが、最後のコンビニに向かう途中でコースを間違え、急がなければと、はやる気持ちから近道を選び、住宅街の道路を通過して目的地へ向

かっていた。

事故現場となった住宅街は中央線の無い狭い道路で、車の通行はほとんどなかったが人通りは頻繁であった。また、薄暮時で周囲は見通しが十分でなかったが、焦る気持ちから、ライトを点けない状態で、制限速度をややオーバーして走行していた。

Aが、住宅街の道路を走行中、前方のT字路交差点付近を見渡したところ、左歩道上で主婦2人が立話をし、その奥で小学校低学年の子供3人が、T字路に合流する住宅街の路地方向に向かって手招きし、誰かに呼び掛けるような素振りをしている状況を認めた。

T字路に接近するにつれ、歩道上の主婦や子供の動向が気になり、その周辺を警戒しながら、多少スピードを緩めて走行する一方、子供が手招きした方向も気掛かりで、路地方向にも眼を転じると、建物の陰で、広く見通せない状況ではあったが、人影は見当たらなかったので安心し、その後のコンビニまでの経路をぼんやりと頭の中に描きながら、漫然と交差点を通過しようとした。

Aが、T字路の直前に迫った時、下り坂になっている路地の建物の陰から、突然Bの自転車が、かなりのスピードで交差点に進入してきた。Aは咄嗟に急ブレーキを掛けたが間に合わず、自車両の前部右側でBの自転車を跳ね飛ばし、Bに重傷を負わせた。

事故の原因

この事故の直接の原因は、Aが運行経路を間違えたことで、焦りが生じ、前方注視を怠ったことである。しかし、その事故に至った背景を考えると、近道を走行しようという理由から、安易に道路幅が狭く、人の行き交いが頻繁な住宅街、いわゆる生活道路を選んだことが、事故の危険性を高めたと考えられる。

特に、事故当時は薄暮時間帯であり、人の姿や建物等、色のコントラストが鮮明でなく、認知や判断ミスが危惧される状況で、ライトも点けずに制限速度をオーバーして走行したことは、軽率で無謀な運転といえる。

また、歩道上にいた子供の不自然な行動を認めながら、「人の姿が見えないから大丈夫」と危険意識を持つことなく漫然と走行したことが事故に結び付いたといえる。

一方、歩道上で立ち話をしていた主婦の一人は、Bの母親であった。母親は、話に夢中になり、子供達の動向に全く注意が及ばなかったのである。母親の無警戒・子供の危険な行動特性が災いし、当該事故の一因となったともいえる。

安全指導

運行経路の設定・確認

安全運行の基本は、事前に綿密な運行計画を立て、運行経路を十分に把握し、随時確認しておくことが大切です。

運行経路を間違えると、急ぎや焦りの心理が芽生え、速度超過や車間距離の詰め過ぎ等が原因となり交通事故の危険が増します。

実際に、ドライバーが“急ぎ・焦り”の心理状態に陥った時に、事故は多発しています。

Aの場合は、運行経路の確認不足がコース間違いを生じ、住宅街の狭い道路を選ぶという、事故のリスクを高める結果となりました。

職業ドライバーにとっては、安全性を重視した運行経路の設定が重要であり、安全運行を確保するためには、幹線道路を中心とした経路設定が基本となります。さらにAのように運転経験が浅いドライバーは、事前に設定した経路を熟知しておくことが大切です。

薄暮時間帯の走行に注意

薄暮時間帯は、重大事故を含め交通事故が最も多く発生しています。

薄暮は、物の明暗・白黒・直線や曲線等が鮮明に対比できない時間帯といわれ、ドライバーによる発見遅れや見落とし・見損じ等が多く、事故発

生の要因となっています。

特に、自転車や歩行者等いわゆる「交通弱者」を巻き添いにする重大事故の危険が高いため、ドライバーには注意深い慎重な運転が求められます。

Aの場合、住宅街の道路で自転車や歩行者等の通行が頻繁で、道路横断や急な飛び出し等が十分予想できたことから、早めにライトを点け、スピードを控えて走行していれば早期に危険を察知し、事故を防げた可能性も考えられます。

薄暮時間帯は、早めにライトを点灯し、スピードは控える運転を徹底しましょう。

生活道路の走行に注意

トラック事故の大半は、「生活道路」で発生しています。

事故現場周辺は、団地を含め住宅が密集する住宅街であり、その中心を走る道路は、自転車・歩行者等「交通弱者」の通行が頻繁でした。

Aの場合、市街地の交通混雑から抜け生活道路に入ったことから、緊張感が薄れ、警戒心も希薄になり、スピードオーバーによる漫然運転を招いたことが、事故の背景にありました。

一般に生活道路では、交通弱者の急な飛び出し、無理な道路横断等、油断がもたらす危険な行動も多く、トラック運転の場合、その発見遅れ・見落とし等が原因で、事故惹起の危険が十分予想されることから、スピードを控え、前方注視を徹底した運転が必要です。

危険を予測した運転の励行

ドライバーが走行の安全を確保するためには、いかに広範囲に目配り・気配りができるかにかかっています。

トラックのような大型車は、車自体に見えない「死角」部分が多いばかりでなく、また周辺にも車両や建物等の眼で捉えられない危険な「死角」がいっぱいです。

ドライバーにとっては、その様な見えない危険を、いかにいち早く読み取るか、「危険を予測した運転」が極めて重要です。

事故防止重点項目の徹底

「交差点右左折事故の防止」

・横断歩道付近の歩行者・自転車等の安全確認を徹底しましょう。

・右折時は対向直進する二輪車、左折時は二輪車・自転車の巻き込みに注意しましょう。

8頁の「平成18年度交通事故防止重点項目」もご覧ください。